

新しいマテリアルに手こずった大越だがしだいに慣れてきて、なんとインターハイには間に合った

二冠で二連覇を果たし、インターハイでやり残したことはない



速報レポート | 第56回全国高等学校スキー大会  
2007 the 56th Inter High School Ski Competition

# 夢の通過点

インターハイは高校生の最大のタイトル戦ではあるものの、一部のトップ選手たちにとっては夢に向けての通過点でもある。彼らにとっての最終目標はもっともつと上にある。しかし、だからと言って、このタイトルが欲しくない選手はいない。この通過点で、将来のスターたちに注目してみた。

写真・二塚幹夫、編集部 GS競技=2月3日~11日 万手野・たいらスキー場  
SL競技=2月5日~6日 万手野・INO-AROSAスキー場  
取材・文=二塚幹夫

## 好敵手

ともに世界の舞台へ

Close Up

I 大越龍之介 & 石井智也  
北海道・東海大四高3年 北海道・北照高2年

足踏みした大越と  
伸びた石井

今回のインターハイ、男子二冠を達成した大越龍之介。そしてSLの2位で初めて表彰台に上がった石井智也。ふたりは中学時代からお互いを意識してきた。高校は違うが会場でも一緒にいるのをよく見かける。全日本ジ

まだ世界のトップとは差がある。でも、確実にレベルアップはしている

ユニアチームでは、ともに世界を相手にしのぎを削る同志であり、ライバルだ。  
今シーズンが始まるまでは、石井がいつも大越の背中を追いかけていたという印象が強かった。大越も追われているという感覚を持っていた。しかし今シーズン、状況は変わりつつある。全日本ジュニアチームの海外遠征でヨーロッパで戦うことが多くなったが、硬いバーンを得意とする石井が大越に負けなくなった。むしろ勝っているのだ。大越は「今シーズンはGSは全敗ですね。これまで一回も勝ってなかった」と言う。  
大越は今シーズンからスキー板とブーツというふたつの重要なマテリアルを変更した。小さい頃から長年慣れ親しんできたスキー板を別のメーカーに変えたこと、しかも今までのものとは性格が正反対のものにしたことで、それを使いこなすのに時間がかかっている。このことも大越が伸び悩んでいる大きな要因のひとつだろう。  
昨年、初めて新しいスキー板に乗ってポールに入ったとき、「これはもう、確実に今シーズンは苦戦するな」と感じた。今まで使っていたスキー板とは「乗る位置がまったく違います。いいところに乗っていないと全然動かない」と実感した。しかし、「良いところに乗ったらガーンと返ってきて、すく良い反応が得られる。タイムは出ますね。それがまだたまにしか出ない。雪質は硬いと良い。硬くなればなるほど良いです」と新しいスキー板の卓越した性能には舌を巻く。とくにこれからヨーロッパのバーンで戦うことになれば、この性能は大きな武器になるはずだ。  
このマテリアルチェンジも影響して大越は思うような成績がまだ出ていない。だが、目の結果にとらわれず、大越は変更したことに満足している。「まだ正しい選択だったかどうかはわからないですけど、今は良かった



大回転では実力が発揮できなかったが、回転では自分本来の滑りを見せて大越をヒヤヒヤさせた石井

「怖いけど力を出せて満足しています」と言う顔は噴れやか



と思っています。どう動かなければならないのか考えるので、いろいろな勉強にもなるし。今まではコントロールもしやすくして乗りやすかったんで、それに甘えていました。新しいスキー板は、これを乗りこなせるようになるにせよと思わせてくれる」と言うようにモチベーションは高まっているようだ。

シーズンも半ばを過ぎ、手応えは確実に増している。「乗りこなすためにやらなければいけないことは見えています。ポジションを良くするためにどうしたらいいのかなど、課題はまだまだたくさんありますが、やらなければいけないことはわかっています」と大越はこれからやるべきことの道筋をつかんでいる。そして、新しいスキー板に慣れ、「性能を引き出せるようになれば、ヨーロッパでも戦えるという実感があります。どれくらい戦えるかはわかりませんが、今よりは確実にレベルは上がると思います」と明日への自信を覗かせた。

### ひとまわり大きくなった石井

一方、石井はヨーロッパカップで一本目のトップ30に残るなど確実に成長している。昨年より体格もひとまわり大きくなった。北照高校の工藤監督も「非常にポジションも高く

## 今シーズンはやっと勝負になってきた。ヨーロッパでも充分に戦える

なったし、身体はできてきた。かなり自分なりに努力してきた跡が見えます。上に行きたいという気持ちは強いですが、今の気持ちは忘れないです。とがんばってほしい」と石井の成長を認める。

ヨーロッパ遠征の成果について石井本人は「ポイントが取れていないけど、ヨーロッパカップでリバース(一本目の上位30位以内)に入ることもできました。昨シーズンは勝負にならなかったけど、今シーズンはやっと向こうでも少しは戦えるかなという感じにはなってきた」と、その手応えを十二分に感じている。

ヨーロッパの硬い雪質は石井の得意とするところだ。今シーズン、12月からほとんどヨーロッパで活動していた石井はインターハイの軟らかい雪質には手こずった。「硬いパイルでスキー板が返ってきて、それをつなげていく滑りをめざしています。軟らかい雪だと踏んでもスキー板が埋まっていくだけなので、まだ軟らかい雪の滑り方がわからないんです」と石井は素直に認めながら、「来年はどこでも勝てるようにならないければ」と悔しさも混じえた口調でつぶやいた。

### 当面の目標はシニアチーム入り

ひとつ下の石井と違って、大越はシニアチーム入りをめざさなければならぬ。シニアへの壁はジュニアと比べてはるかに高い。10月の初めからほとんどヨーロッパで戦った大越はFISポイントも取れていない。ナショナルチームに残るために、「ひとつも昨シーズンを上まわっていない。だいぶ追い込まれています」と大越は言う。世界ジュニアに出場する大越はファイナリストカップ・ジャパンスリーズには出場できない。ポイントを取るにはヨーロッパか北米のレースで結果を残

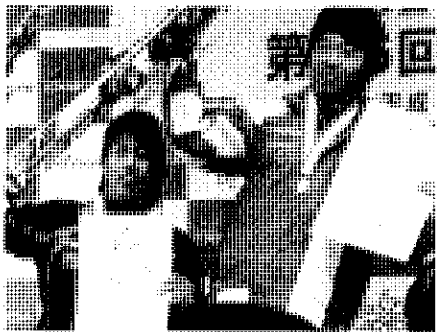
すしか道は残されていない。

ポイントは取れなかったものの、大越も石井と同様、「昨シーズンと比べると、ちょっと世界が見えてきた。確実にレベルアップしてると思うし、結果も明らかに良くなってる」と自分が進歩している実感を持っている。

世界との距離も実感できてきた。「世界と戦うんだったら、ヨーロッパカップでリバースにしっかりと入れないとダメですね。まだそこまでは全然足りない」と話す。

世界のトップにはまだ遠くおよばないが、同世代の選手には絶対に負けたくないという気持ちは強い。「すごく速い奴がいるんです。そいつに全然勝てなくて。でも、そのほかはみんな少し上くらいですね。そいつ以外はもう少しで手は届きます」と大越は言う。

世界では「まだトップには行けないという感じですが、差はあります。でも、まだまだ上には行けます」と大越の目は遠くを見ている。



これと同じシーンを世界の舞台で見せてほしい



関子が良くないと言いつつも、親も大越の牙城を崩せなかった。高澤、石井は翌日のSLにすべてを賭ける



2位●高澤 伸 (歌志内)

歌志内高校最後のインターハイで2位の表彰台に上がった高澤。ライバルの大越、石井には負けたくないと言う



3位●塩田大喬 (飯山南)

ジュニアチームの影で目立たないながらも1本目4位、2本目で2位という堅実な走りで3位となった塩田も実力はクラストップ



4位●石井智也 (北照)

ヨーロッパの強い雪と日本の軟雪。その違いにうまく対応できずに、表彰台を逃してしまった

男子ジャイアント・スラローム (2月4日、たいらスキー場)									
順位	No.	氏名	所属	学年	1本目	2本目	合計タイム		
1	15	大越龍之介	南北海道 東海大岡	3年	56.21	59.47	1:55.68		
2	4	高澤 伸	北北海道 歌志内	3年	56.31	1:00.39	1:56.70		
3	12	塩田大喬	長野県 飯山南	3年	57.00	1:00.03	1:57.03		
4	1	石井智也	南北海道 北照	2年	56.64	1:00.66	1:57.30		
5	20	森谷 颯	南北海道 東海大岡	3年	57.18	1:00.31	1:57.49		
6	13	小松悠平	岩手県 平谷	3年	57.63	1:00.94	1:58.57		
6	01	小越剛己	滋賀県 平谷	2年	58.18	1:00.39	1:58.57		
8	2	及川貴寛	南北海道 札幌第一	3年	57.24	1:01.47	1:58.71		
9	43	小藤正徳	南北海道 札幌第一	3年	58.08	1:01.25	1:59.33		
10	8	有原 時	新潟県 関志学園	1年	58.78	1:00.60	1:59.38		
11	14	佐谷亮太	新潟県 滑川	2年	58.20	1:01.28	1:59.48		
12	6	和田圭悟	秋田県 花輪	3年	58.04	1:01.51	1:59.55		
13	51	近藤慎也	新潟県 新井	2年	58.04	1:01.73	1:59.77		
13	66	米田周平	南北海道 双葉	1年	59.23	1:00.54	1:59.77		
15	42	塩田一平	岐阜県 岐阜第一	3年	59.03	1:00.78	1:59.81		

男子は昨年二冠の大越龍之介(東海大岡)が頭ひとつ抜き出ている感じだが、自他ともにライバルと認めるひとつ年下の石井智也(北照)が急激に追いついてきている。1週間前に終えたばかりの欧州遠征では、GSでは石井のほうがいつも上位だった。同じく欧州帰りの高澤伸(歌志内)も実力は高く悔れない存在だ。

始まってみると1本目のベストタイムは大越で、続いたのは高澤、石井とほぼ予想どおりの結果。全日本ジュニアチーム強しという感が強い。高澤が在籍する歌志内高校は今季限りで廃校が決定しており、スキー部の最後に華を添える意味でも優勝が欲しいところだ。

2本目、GSの関子はけっして良くないという大越だったが、ここでも他の選手を引き離したベストタイムをたたき出し、去年に引き続いて2本ともベストタイムをそろえた完勝を果たした。「GSは今年すつと智也に負けてます。一回も勝ってなかった。今日、初勝利です。正直、智也に勝てないと思ってま

した。一応は完勝で、こんな結果は想像してなかった。いいとこ僅差かなと思ってたんで、今回はラッキーでした」と話す大越だが、その表情には余裕が感じられた。

大越も認めるように実力的には逆転が期待された石井だったが、2本目は「ミスが多くて」と言うとおりタイムは伸びず4位に終わった。1本目も「コース上部で一回転んで、もう終わったと思ったけど、どうにか次のポールに入れてゴールできた」という滑りだった。「軟らかい雪だと踏んでも埋まっていっただけなので苦手です」と悔しそうに話した。

2位の高澤は「2本目はむずかしかったですね。でもけっこうガンガンいって、そしてら逆に失敗しました」と言う。歌志内高校の湯谷教諭は「1週間前に遠征から帰ってきて、基本的な部分が崩れていたと思うんですが、そう考えると今日はもう上出来です。短い時間で高澤自身が調整してくれた」と話す。

3位には2本目に大越に次ぐタイムを記録した塩田大喬(飯山南)が入った。

# 男子

2月4日、たいらスキー場

大越龍之介は、2本ともベストタイムで  
前年と同じ順位を記録、予選どおり二冠覇を果たす

**優勝●大越龍之介** (東海大岡)



**2位●石井智也 (北照)**

GSでは力を出し切れなかった石井もSLでは力を出し切れたと言うが、わずかに大越におよばなかった。より広い世界で戦い続ける



**3位●中村和司 (花輪)**

1本目3位のタイムだった中村は2本目の荒れたコースには苦戦。しかし、3位の表彰台は守りきった



二冠、二連覇という最高の結果に、大越は表彰式でも笑顔の笑みで一番高いところに立った



斜面変化の手前や直後に落とし穴が待つコースとセットは、1年生トップの実力者、右膝怪をも飲み込んだ

男子スラローム (2月6日、IOX-A ROSAスキー場)

順位	No.	氏名	出身	所属	学年	1本目	2本目	合計タイム
1	15	大越龍之介	北海道	東海大四	3年	46.43	50.11	1:36.54
2	13	石井智也	北海道	北照	2年	46.36	50.42	1:36.78
3	7	中村和司	秋田県	花輪	2年	46.92	51.81	1:38.73
4	12	及川直貴	北海道	札幌第一	3年	47.81	51.24	1:39.05
5	48	藤本 貴	北海道	北海学園札幌	3年	49.05	51.64	1:40.70
6	124	岡本清司	北海道	富良野緑雫	2年	49.89	50.81	1:40.70
7	43	近藤慎也	新潟県	新井	2年	49.05	51.81	1:40.86
8	20	小嶋龍也	岩手県	平盛	2年	49.88	51.39	1:41.24
9	61	寺岡健樹	北海道	ニセコ	2年	50.07	51.53	1:41.60
10	42	佐々木悠生	青森県	青森山田	3年	49.82	51.87	1:41.69
11	45	金子祐大	岐阜県	岐阜第一	2年	48.82	52.05	1:41.77
12	105	小林大志	北海道	立命館慶祥	2年	49.84	51.96	1:41.80
13	41	岡崎信之介	山形県	日大山形	3年	49.52	52.29	1:41.81
14	60	小林日向	新潟県	八海	1年	51.46	50.58	1:42.04
15	50	宇佐賀真太郎	長野県	松本深志	2年	49.51	52.54	1:42.05

混戦が予想された男子SLは前日の女子以上に気温が上がり、コースの荒れが気になった。荒れていない1本目の第1シードでも伊藤達哉(駒大岩見沢)、高澤伸(歌志内)といった実力者が次々とコースアウトし、波乱のレース展開が予想されたが、1、2位のタイムは順当に石井智也(北照)、大越龍之介(東海大四)のふたりだった。

ふたりのタイム差は100分の7秒とわずかで、どちらが優勝してもおかしくない。石井はGSの惜りをここで返したいところ。また、大越も連覇と二冠がかかっているのが負けられない。

2本目は1本目以上にコースが荒れ、ひとつのミスが勝敗を分ける模様となった。両校のコーチも「ドキドキです」と同じ言葉を話し、同じ心境だということがわかった。

2本目は大越がスタート直後からフルアタック。石井は急斜面までにスピードに乗れず一歩遅れを取った。結局、大越がベストタイムをたたき出し逆転で優勝。二冠、二連覇を

決めた。2本目のセカンドタイムも石井で、ふたりの一騎打ちというレースだった。石井は「2本目のスタート、ちょっとミスした。でも、後半挽回したからいけるかなって思ってたんですけど、ちょっと足りなかったですね。今日は自分の力を出せて満足しています。勝利には足りなかったので悔しさはありますけど、納得できるレースだと思えます」と悔しさはあるが清々しい表情だった。

大越は「1本目は途中棄権が多く、けっこう危ないって情報もあったので、ちょっと抑えました。2本目はもう攻めなきゃ勝てないと思ったので、全力でいってゴールまで、勝つて良かったです。2本目はすごい緊張しました。心臓バクバクで今までのレースの中で一番、緊張しましたね。2本目はだいぶ荒れてました。でも、自分の持ち味のグチャグチャになっても攻める、そういう感じで滑りました」とうれしそうに笑顔を満面に浮かべた。3位には1本目で石井、大越に次いだ中村和司(花輪)が、その位置を守った。

# SL 男子

2月6日、IOX-A ROSAスキー場

大越龍之介と石井智也の一騎打ち。  
僅差で大越に軍配が上がり二冠、二連覇を達成。

**優勝●大越龍之介 (東海大四)**

高校最後のインターハイも二冠で二連覇を成し遂げた。「高校ではやり残したことはない」と言う大越の次の舞台は世界だ

